

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32507

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12932

研究課題名（和文）田山花袋の平面描写論を中心とするジャンル・流派横断的文学理論研究

研究課題名（英文）Study on Tayama Katai's "heimen-byosya" and the other contemporary literary theories

研究代表者

小堀 洋平（Kobori, Yohei）

和洋女子大学・人文学部・准教授

研究者番号：30706643

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本自然主義の代表的作家である田山花袋の「平面描写」論を出発点として、同時代の文学者たちによって提唱された多様な文学理論の言説配置を、ジャンルおよび流派横断的に明らかにした。具体的には、主に次のような知見が得られた。1）太田玉茗をはじめとする初期花袋周辺の詩人たちは、近世以来の桂園派の歌論を再解釈することで自らの文学観を形成した。2）花袋と同時代作家たちの文学論の形成にとって、哲学者大西祝の言説が重要な役割を果たした。3）花袋の「平面描写」期の作品が、ジャンル・流派の別を越えて大きな反響を呼び、文学作品における内容と形式の関係が再考されるきっかけとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、文学理論の研究はジャンル・流派別に行われることが多かったが、本研究では、花袋の平面描写論を出発点として、相異なる流派・ジャンルに属する理論言説を相互に比較し、同時代の言説空間のなかに位置づけることができた。とりわけ、桂園歌論を媒介に近世から近代への文学理論の発展の一端を明らかにできたこと、大西祝を中心に明治・大正期における哲学と文学の交流の一端を明らかにできたことに、本研究の学術的意義があると思われる。社会的には、近代日本の文学理論の歴史的解明をとおり、今日における文学の意義を再考する契機を広く一般市民に提供できた点が成果として挙げられる。

研究成果の概要（英文）：Starting from a representative Japanese naturalist Tayama Katai's "heimen-byosya" theory, this research examines the discourse arrangement of various literary theories advocated by writers of the same era across genres and schools. Specifically, the following findings were mainly obtained. 1) The poets around early Katai, including Ota Gyokumei, formed their own literary views by reinterpreting the poetics of the Keien school. 2) The discourse of Hajime Onishi played an important role in the formation of the literary theory of Katai and his contemporaries. 3) Katai's works in his "heimen-byosya" era have generated a great response beyond the boundaries of genre and school, and have triggered a reconsideration of the relationship between content and form in literary works.

研究分野：日本近代文学

キーワード：田山花袋 平面描写 太田玉茗 三木露風 大西祝 桂園派

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点である花袋については、研究開始当初、フェレーナ・ヴェルナー Verena Werner 『語り手の消滅 1902年より1908年に至る田山花袋の小説の物語論的分析』(2006)のナラトロジーの立場からの分析、ケネス・G・ヘンシャル 『自然を求めて 日本の作家田山花袋』(2013)の比較文学的観点を取り入れた作家論、伝統的作品論の方法による岸規子 『未完の物語 田山花袋研究二』(2014)、文化研究の手法を取り入れた光石亜由美 『自然主義文学とセクシュアリティ 田山花袋と 性欲 に感傷する時代』(2017)、比較文学的方法に重点を置いた申請者の 『田山花袋 作品の形成』(2018)など、多彩な方法による研究が盛んに行われていた。このように、花袋は、国内外においてきわめて多様な角度から注目を集めている作家であった。

そのような花袋の文学理論としてもっとも著名な「平面描写」は、花袋『生』における試み(1908)において「単に作者の主観を加へないのみならず、客観の事象に対しても少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、たゞ見たまゝ聴いたまゝ触れたまゝの現象をさながらに描く」方法として定式化され、近年では一般にナラトロジーの焦点化理論の適用によってその理解が精緻化されてきた(その代表的成果は永井聖剛『自然主義のレトリック』2008)。しかしながら、そのような理解のあり方は、ナラトロジーの本来の対象領域が物語・小説ジャンルであるがゆえに、他ジャンルとの比較を困難にする傾きをもっていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、花袋の平面描写論を出発点として、同時代の文学者たちによって提唱された多様な文学理論の言説配置を、ジャンル・流派横断的に明らかにすることを目的に実施された。従来、文学理論の研究は作家別に行われる場合が多く、やや広い視野による場合でもジャンル・流派ごとの研究に止まることがほとんどであって、同時代の文学理論の言説配置を総体として解明しようとする試みは少なかった。一方、本研究の独自性は、それらの相異なる流派・ジャンルに属する理論言説を相互に比較し、同時代の言説空間のなかに位置づけようとする点に存する。さらに、本研究は、明治文学から大正文学への転換期にあたる1910年前後の文壇における言説配置の解明へと発展する創造性を有している。

## 3. 研究の方法

本研究は、文献調査の方法を軸に進められた。対象とした主な文献は以下のとおりである。

- (1) 花袋と親密な交友関係のあった詩人太田玉茗の評論「桂園和歌論」とその周辺資料。
- (2) 第二に、花袋のドストエフスキ受容に関する評論・随筆類。(以上2020年)
- (3) 大西祝の『西洋哲学史』の同時代文学者における受容をめぐる資料群。(以上2021年)
- (4) 花袋の小説「罨」の同時代評と当時における文学の形式と内容の関係をめぐる評論類。
- (5) 花袋の新出の新体詩「琴の音」をめぐる地方文壇関係の資料群。(以上2022年)

## 4. 研究成果

(1) 桂園派歌人松浦辰男門下の紅葉会で、花袋と親密な交友関係にあった詩人太田玉茗による評論「桂園和歌論」の分析を行い、その成果を論文「太田玉茗「桂園和歌論」の位相 大西祝およびハルトマンとの関連から」(『解釈』67巻1・2号、2021年1月)として発表した。「桂園和歌論」は、玉茗の仏教思想の素養を背景として、近世歌人香川景樹の歌論と、ドイツの哲学者E・ハルトマンの無意識哲学との結合を図る試みであった。それは桂園歌論の革新性を評価する基本的観点を大西祝「香川景樹翁の歌論」(1892)から継承しつつも、その中核をなす「調」の説の解釈においては、大西の弁証法的・合理主義的傾向とは対照的に、強い形而上学的・非合理主義的傾向を有していた。そのような傾向を助長したのがハルトマンの無意識哲学の影響であったと考えられる。

(2) 平面描写期における花袋のドストエフスキ受容を整理した論文「「平面描写」論提唱期における田山花袋のドストエフスキ受容 語り・プロット・主人公」(『花袋研究学会々誌』37号、2020年7月)を発表した。これは、ドストエフスキへの花袋の姿勢から、平面描写論の再解釈への展望を示したものである。

(3) 論文「三木露風『大西博士の西洋哲学史』の意味するもの 『白き手の獵人』と『露風詩話』のあいだで」(『解釈』68巻1・2号、2022年2月)において、以下の点を明らかにした。第一に、『大西博士の西洋哲学史』執筆におけるプラトンの想起(アナムネーシス)説の確認は、「不意にくる記憶のやうな感動」を詩作の契機として重視する露風の主張(『露風詩話』)の根拠となつたと考えられる。第二に、プラトン倫理学の要約における、「美術的方面」を省略して「解脱的方面」のみを記述する姿勢は、当時の露風作品における「感覚・官能の要素」を篩い落した「観念の裸形」の詩風と共通するものであった。なお、そのような宗教的傾向は、大西の原著における「文明史」的観点が露風の要約では捨象されていることと表裏をなしている。第三に、「近世哲学」の部では、パークリーの独在論を重視する姿勢を露風は見せており、その傾向はこの期の露風における「自然」を「内部の感動」の展開とする見方(『白き手の獵人』)と

通底するものであった。以上のように、『大西博士の西洋哲学史』の要約姿勢は、詩集『白き手の獵人』より詩論集『露風詩話』に至る時期における露風の詩および詩論の傾向を基礎としつつ、反作用としてその傾向を助長するものでもあった。

(4) 学会発表「時代閉塞と形式破壊 田山花袋「罨」の読まれ方」(全国大学国語国文学会第125回大会、2022年6月12日)において、田山花袋の短編小説「罨」を採り上げ、それが内容・形式ともに同時代の文学が抱えていた大きな問題、すなわち日露戦後から大逆事件に至る時期の社会の閉塞状況をどのような方法で形象化するかという問題を、典型的なかたちで包含する作品であったことを論証した。

(5) 資料紹介「田山花袋「琴の音」 地方文芸誌『寿々夢詞』掲載の新体詩」(『和洋国文研究』58号、2023年3月)において、田山花袋の新出の新体詩「琴の音」(『寿々夢詞』1903年9月)を翻刻、解題した。この作品自体は花袋の新体詩として突出したものではないが、花袋と地方文壇との接触を窺わせる資料として価値のあるものである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>小堀 洋平   | 4. 巻<br>68(1,2)     |
| 2. 論文標題<br>三木露風『大西博士の西洋哲学史』の意味するもの 『白き手の獵人』と『露風詩話』のあいだで | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>解釈  | 6. 最初と最後の頁<br>22-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                           | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>小堀 洋平   | 4. 巻<br>37          |
| 2. 論文標題<br>「平面描写」論提唱期における田山花袋のドストエフスキ受容 語り・プロット・主人公     | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>花袋研究学会々誌                                      | 6. 最初と最後の頁<br>1-15  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                           | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>小堀 洋平   | 4. 巻<br>67(1・2)     |
| 2. 論文標題<br>太田玉茗「桂園和歌論」の位相 大西祝およびハルトマンとの関連から             | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>解釈  | 6. 最初と最後の頁<br>2-12  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                           | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                  | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>小堀 洋平   | 4. 巻<br>(58)        |
| 2. 論文標題<br>資料紹介 田山花袋「琴の音」 地方文芸誌『寿々夢詞』掲載の新体詩             | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>和洋国文研究  | 6. 最初と最後の頁<br>86-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                           | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                  | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>小堀 洋平                  |
| 2. 発表標題<br>時代閉塞と形式破壊 田山花袋「罨」の読まれ方 |
| 3. 学会等名<br>全国大学国語国文学会第125回大会      |
| 4. 発表年<br>2022年                   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| 6. 研究組織 | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|